

2000年3月発行 第24号

「今年度の就職状況(2月21日現在)」

・・・小学校保護者研修会を振り返って・・・

進路指導部 今城 慎一郎

28名中、26名(一般就労12名・福祉的就労10名・進学4名)の進路が決定しました。未定の2名についても、方向性は定まっています。高卒就労希望者の内定率が昨年12月末日現在過去最低の71.3%から考えると何とか乗り切れたと言えます。

しかし、進路先を決定した事で完結したのでは無く、先日小学校の保護者研修会で申し上げました通り、職場定着を支援していく事こそが、我々東学園の教育そのものなのです。通過点である進路問題を身近な事、先の事と、意識に差が出るのは致し方がありません。今出来る事を継続的に行い、向上させていく事が得意分野の発見や、苦手分野克服につながり、将来役立つのです。就労する時から逆算した対応が望まれます。往々にして、先行する不安から即効性のある対処法を求めがちではありますが、これで大丈夫という事はありません。ですから、出来るだけ多くの情報を収集し、その中から取り掛かりやすいものを選び適正を図ることも一つかもしれません。向き不向きを判断していく時に「これしかない」と決めつけてしまうと、お子さんの進むべき道を狭め、何が本人にとって幸せなのかが見えなくなることがあります。先日の感想に、「一般就労のことばかりでレベルが高すぎて参考にならない」というものがありました。進路の方向性を定める時に、療育手帳の度数や成績の順位で決めるならばご指摘の通りです。何気なく用いているレベルという言葉、高等専修学校では全く考えておりません。実際に職場実習における評価の善し悪しの基準は、少なくとも手帳の度数ではありません。取得している検定の数が多いという事でもありません。ましてや、会話によるコミュニケーションがとれない、仕事が出来ないという事でもありません。問題は、情緒的な安定なのです。誰にでも、一定の仕事と上司や指導員の指示と時間さえあれば必ずその仕事を仕上げる事が出来ます。他と比較して生じるのは、完成度と消費時間から算出される生産性の差だけで、初めから要求されるものではありません。

機会を一つでも多く掴み、習うのではなく慣れることに努める事が社会では初めの一步だと思います。

一般就労と福祉的就労に違いは無い事を、次の様に説明する事があります。「野球好きは、プロ野球チームでも草野球チームでも自分の野球が出来れば同じ様に楽しめる。所属チームは居心地の良さであり、好きな野球が仕事なのではないでしょうか？」